

学校スポーツ活動を通じた基礎的・汎用的能力の育成に関する検討

長谷川 誠¹・黒田 真二²

¹ 神戸松蔭女子学院大学人間科学部

² 中京大学スポーツ科学部

Author's E-mail Address: hase@shoin.ac.jp

Study on the development of basic and general abilities through school sports activities

HASEGAWA Makoto¹, KURODA Shinji²

¹ Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

² School of Health and Sports Sciences, Chukyo University

Abstract

現在、学校教育においては、基礎的・汎用的能力の育成が求められており、これら能力を育成する取り組みのひとつとして部活動があげられている。こうした状況を背景に本稿では、高校の運動部活動や大学スポーツ活動経験のある大学生への調査を通して、中学、高校の運動部活動が将来の就職や生き方に与える意識の差や、大学進学時の入試区分、専攻の違いが、基礎的・汎用的能力育成についての自己認識の違いに与える影響を検討した。

統計分析に基づく検討の結果、中学、高校の運動部活動が将来の就職や生き方に影響を与えると考えている者が多かった。そして、影響を与えると考える者は他者理解や自己理解などの能力を高めていると認識していた。また、入試区分別でみると、高校の運動部活動経験では違いがみられなかった一方で、大学入学後もスポーツ活動を継続している者は、主体性や他者理解、計画性に対する意識に差があることが確認された。他方で、専攻では違いがみられなかった。

最後に、このように学校スポーツ活動は、基礎的・汎用的能力の形成に貢献する側面を持っている一方で、負の側面があることを指摘し、学校現場は、これら両面を理解しながら、生徒や大学生への指導を考えていく必要があると論じている。

Currently, school education requires the development of basic and general-purpose abilities, and club activities are one of the efforts to cultivate these abilities. Against this backdrop, this paper examines the effects of differences in awareness of the impact of junior high school and high school athletic club activities on future employment and lifestyle, as well as differences in self-perception of basic and general abilities development due to differences in entrance examination categories and majors when entering universities, through a survey of university students who have experience in high school athletic club activities and university sports activities.

As a result of the examination based on statistical analysis, many respondents thought that athletic club activities in junior high school and high school had an influence on their future employment and way of life. And those who thought they had an impact recognized that they enhanced their abilities to understand others and themselves. By entrance examination category, while there were no differences in high school athletic club experience, those who continued their sports activities after entering college showed differences in their awareness of independence, understanding of others, and planning. On the other hand, no differences were found among majors.

Finally, the study points out that while school sports activities thus have aspects that contribute to the formation of basic and general abilities, they also have negative aspects, and argues that school sites need to understand both of these aspects while considering how to teach students and university students.

キーワード：運動部活動、高校、大学、キャリア形成

Key Words: athletic club, high school, university, career development

1. 問題の所在

本稿の目的は、高校の運動部活動、大学スポーツ経験者に対する調査を通して、部活動経験が自身の就職や生き方等のキャリア形成に与える意識や大学進学時の入試区分、専攻の違いに注目し、基礎的・汎用的能力の育成との関係について検討することである。

学校教育活動における部活動¹⁾の位置づけは、教育課程外の活動とされている。しかし、実際には、中学生や高校生の多様な学びの場として、教育的意義が高いことから、学校教育活動において重要な役割を果たしている。2008年に告示された(高等学校は2009年)の学習指導要領より、部活動は「学校教育の一環として教育課程との関連が図られるよう留意すること」と明記され、中学校学習指導要領の「総則」に部活動が位置づけられることになった(文部科学省2008)。このことは、あらためて部活動が学校教育現場において重要な位置づけにあることを示したといえる(清水2011)。

では、学校教育において重視される能力はどのように示されているのだろうか。文部科学省(2010)は基礎的・汎用的能力の具体的内容について「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力に整理した。それぞれ

れの内容は以下のとおりである。

- ① 「人間関係形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。
- ② 「自己理解・自己管理能力」は、自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。
- ③ 「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。
- ④ 「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」を担う意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

これら能力への注目は、2010年以降のキャリア教育の強化の動きとも関連している。文部科学省(2013)は「社会を生き抜く力の養成」を方策のひとつに掲げ、キャリア教育を通じて、社会への接続の意識を高める必要性を示し、社会的・職業的自立に向けた力の育成を目指した(文部科学省2013)。そして、2018年の答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」の中では、「高等教育が目ざすべき姿」として、「基礎的で普遍的な知識・理解と汎用的な技能を持ち、その知識や技能を活用でき、ジレンマを克服することも含めたコミュニケーション能力を持ち、自律的に責任ある行動をとれる人材を養成していく」と記されている(文部科学省2018)。このように現在、学校教育においては、変化の激しい社会を生き抜くために必要な能力として、主体性や協働性、問題発見・解決能力などの基礎的、汎用的能力の育成が求められている。

さて、あらためて部活動が持つ教育的意義についてみてみたい。内海は「子どもたちの発育・発達、人間形成上の意義ばかりでなく、チームプレーやフェアプレーなどの学習、そして自立心などの形成に寄与する」、学校生活への意義として「異学年間の交流、教師との交流など、時にはクラスメイトよりも密接な交流を持ち、学校生活への適応、勉強との両立など、学校教育全体の活性化に部活動の活発な活動が果たす役割は大きい」と論じている(内海2009)。また、部活動は目標の達成や他者との協働、感情のコントロールなどに関する資質、能力とされる社会情動的スキルにおいても一定の効果があるとの指摘もある(ベネッセ教育総合研究所2018)。これらを見れば高校までの部活動は、通常の教室空間とは異なり、同年齢の他、先輩後輩といった異年齢集団による活動であることや、部員一丸となって大会やコンクール等で勝利するという共通の目標に向かうことを通して、チームワークの大切さや何

かを成し遂げる達成感を得られる等、重要な教育活動になっているといえる。

このように高校段階までに部活動を通じて養われた能力は、大学入試を経て大学スポーツの場に引き継がれることとなる。大学スポーツを通じた能力形成に関して金森・蛭田は、体育会運動部に所属する現役大学生は、その活動を通して、「人間関係・上下関係・礼儀作法」「チームワーク・協調性・仲間」という対人関係に関することと、「体力・競技技術」「努力・忍耐力・精神力」「社会性・教養・経験」「人間形成・思考力」「主体性・リーダーシップ」「コミュニケーション力」という力や内面に関することに大別されることを習得していると認識していることを明らかにしている（金森・蛭田 2018：53）。

つまり、大学スポーツは、高校部活動と同様に、様々な能力形成の場になっており、また、企業側も学校スポーツ活動に取り組んできた者を好んで採用する傾向もある。例えば、松繁は体育会系出身者の就職と昇進に状況について検討した結果、「中高、大学におけるスポーツ活動が職業人としての基本的な特性や対人能力の形成に与える効果」「企業は、こうした能力を身に付けた者、適性の高い者を選別した結果、体育会系出身者を採用している」と指摘している（松繁 2005）。榎本は体育会系学生が企業から好まれる理由として、「体育系運動部では、練習する際の努力、部内の人間関係の構築、試合に負けたときの悔しさやケガや不調の克服といった諸課題を乗り越える経験によって、社会人として活躍するためのさまざまな能力が培われるが、勉強と両立させようと努力することにより職業上のキャリア形成に必要な力を獲得することができている」と述べ（榎本 2020）、高校までの部活動と同様、大学におけるスポーツ活動の場は、社会の側からも学校から社会への接続へ向けて必要とされる能力を形成する重要な教育活動の場として捉えられている。

こうしてみると、高校部活動や大学スポーツ活動を通じて得られるこれらの能力に対しては、企業側からも一定の評価が得られており、冒頭で示した「仕事に就くため」に必要な基礎的・汎用的能力の育成につながっている点で、部活動の重要性を確認することができる。

さらに、2021年度からの開始された大学入試制度の個別の入学者選抜においては、多様な評価方法を工夫しつつ、「主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度」についての評価を重視し、調査書の活用等、具体的な方法についての言及があり、部活動等の各種大会記録も対象（文部科学省 2016：42）となっている。つまり、今後は、高校時代の部活動を通じて得られた能力が、大学進学により一層影響を与えと考えられ、生徒のキャリア形成に大きく関わることとなる。また、部活動経験を活かし、大学進学した者は、さらに大学スポーツ活動経験を通して、ここまでみてきたような様々な能力を身につけて就職活動に挑み、学校から社会へスムーズな接続を目指すことになる。

以上をふまえると、生徒のキャリア形成において高校部活動が与える影響の度合いが高まる今、部活動や大学スポーツなど学校スポーツを通じて育成される基礎的・汎用的能力に対して、かれらはどのような意識を持ち、その能力が自身のキャリア形成にどのような影響を与えるのかを、あらためて確認することは、極めて重要だといえる。そこで本稿では、高校運動部活動、大学スポーツ活動経験者に対する調査を通して、中学、高校の部活動経験が将来の就職や生き方に与える意識の差や大学進学時の入試区分、専攻の違いが、基礎的・汎用

的能力育成についての自己認識の違いに与える影響を検討してみたい。

また、本稿においては、高大接続研究の視点として入試区分の違いにも注目している。これまでも部活動や大学スポーツとキャリア形成、入試接続に関する研究においては、スポーツ推薦に注目した研究は多くみられるが（清宮他 2015 栗山 2017 長谷川 2020 など）、今回、推薦入試をスポーツ推薦と、その他の推薦入試（AO 入試、指定校入試を含む）に区分し分析をしている。理由は、先述のとおり、大学入試新制度への移行にともない、部活動経験がスポーツ推薦以外の推薦入試に与える影響が高まっていることをふまえ、これらを分けて分析することであらためて傾向を整理することができると考えたからである。

2. 研究方法

調査は、2022 年 6 月から 7 月に実施した。サンプルサイズは計 252 名であり、高校時代に運動部活動経験がある大学生を対象としている。内訳は男性 178 名、女性 73 名、無回答 1 名。学年別では、1 年 20 名、2 年 193 名、3 年 37 名、4 年 2 名分野別では、体育系 167 名、人文系（語学、地域文化）34 名、社会科学系（経営）51 名、また、学力レベルは、大手予備校が示す偏差値レベルで中下位に位置している²⁾。

基礎的・汎用的能力の育成状況についての捉え方を把握するために、表 1 に示す設問から構成される自記式質問紙調査を行なった。先述の文部科学省が示した基礎的・汎用的能力の具体的内容として記されている「人間関係形成・社会形成能力」は「①主体性」「②協働性」「③他者理解」、「自己理解・自己管理能力」は「④自己理解」、「課題対応能力」は「⑤課題発見力」「⑥計画性」とした。そして、質問①から⑥に関する回答結果について、表 4、表 6、表 8 は高校時代の運動部活動経験を基にしており、表 5、表 7、表 9 は調査対象者のうち大学入学後もスポーツ活動を継続している者を対象とし、かれらの大学スポーツ活動経験を基にしている。

入試区分については、「AO 入試」「指定校推薦」「推薦入試」「その他（特別推薦）」を「AO・推薦」、「スポーツ推薦」は「スポーツ推薦」、「一般選抜」「大学入学共通テスト試験利用」は「一般・共通テスト」と区分した。分析については、統計ソフト IBM SPSS Statistics Ver.25.0 を用い、5% を有意水準として、カイ二乗検定、t 検定、一要因分散分析およびチューキーの多重比較を行った。

表1 変数のコーディング

部活動が就職・生き方に与える影響	「中学校、高校の部活動が将来の就職や生き方にどのような影響を与えるか」 「1. 影響を与える」 = 「与える」 「2. 影響を与えない」 = 「与えない」
①主体性	「主体的・自主的に物事に取り組めるようになった」 「あてはまる」 = 4 「ややあてはまる」 = 3 「あまりあてはまらない」 = 2 「あてはまらない」 = 1
②協調性	「周囲と協力し合って物事に取り組めるようになった」 「あてはまる」 = 4 「ややあてはまる」 = 3 「あまりあてはまらない」 = 2 「あてはまらない」 = 1
③他者理解	「他者の個性を理解できるようになった」 「あてはまる」 = 4 「ややあてはまる」 = 3 「あまりあてはまらない」 = 2 「あてはまらない」 = 1
④自己理解	「自分のできること、したいことがわかるようになった」 「あてはまる」 = 4 「ややあてはまる」 = 3 「あまりあてはまらない」 = 2 「あてはまらない」 = 1
⑤課題発見力	「課題を自ら発見できるようになった」 「あてはまる」 = 4 「ややあてはまる」 = 3 「あまりあてはまらない」 = 2 「あてはまらない」 = 1
⑥計画性	「計画的に課題の解決に取り組めるようになった」 「あてはまる」 = 4 「ややあてはまる」 = 3 「あまりあてはまらない」 = 2 「あてはまらない」 = 1

なお、本稿で扱う大学スポーツ活動は、各調査対象校において強化対象となっている運動部（以下、体育会）での活動であり、同好会、サークルではないことを付言しておく。

そして、調査実施にあたっては、個人が特定されることはないことや、調査の途中で本人の自由意思で取りやめることが可能なことを伝え、論文への記載についても本人の了承を得た上で行った。

3. 調査の結果

はじめに、部活動が就職・生き方に与える影響（与える・与えない）について入試区分（表2）と体育会の所属の有無（表3）、それぞれにおいて違いがみられるか確認するためにカイ二乗検定を行った。入試区分（ $\chi^2 = 2.430$, $df = 2$, n.s.）、体育会の所属の有無（ $\chi^2 = 0.852$, $df = 1$, n.s.）ともに、有意な差は確認されず、それぞれ部活動が就職・生き方に与える影響の違いはみられなかった。つまり、入試区分の違いや体育会の所属の有無にかかわらず、「与える」が多い結果となった。

表2 「部活動が就職・将来の生き方に与える影響」と「入試区分」のクロス集計表

			与える	与えない	合計
A0・推薦	度数		89	13	102
	構成比		87.3%	12.7%	100.0%
入試区分 スポーツ推薦	度数		102	15	117
	構成比		87.2%	12.8%	100.0%
一般・共通テスト	度数		23	7	30
	構成比		76.7%	23.3%	100.0%
合計	度数		214	35	249
	構成比		85.9%	14.1%	100.0%

($\chi^2=2.430$, $df=2$, n.s)

表3 「部活動が就職・将来の生き方に与える影響」と「体育会の所属の有無」のクロス集計表

			与える	与えない	合計
所属	度数		169	30	199
	構成比		84.9%	15.1%	100.0%
無所属	度数		45	5	50
	構成比		90.0%	10.0%	100.0%
合計	度数		214	35	249
	構成比		85.9%	14.1%	100.0%

($\chi^2=0.852$, $df=1$, n.s)

次に、各質問項目について部活動が就職・生き方に与える影響（与える・与えない）で差がみられるか確認するためにt検定を行った（表4）（表5）。検定の結果、高校時代をみると（表4）、①「主体性」（ $t=1.17$, $df=205$, n.s.）、②「協調性」（ $t=1.59$, $df=205$, n.s.）については、有意な差は確認されなかった。③「他者理解」（ $t=2.70$, $df=205$, $p<.05$ ）、④「自己理解」（ $t=2.95$, $df=205$, $p<.05$ ）、⑤「課題発見力」（ $t=2.70$, $df=205$, $p<.01$ ）、⑥「計画性」（ $t=2.70$, $df=205$, $p<.05$ ）では、いずれも「与える」が「与えない」より有意に高かった。そして、大学時代をみると（表5）、①「主体性」（ $t=2.994$, $df=197$, $p<.01$ ）、②「協調性」（ $t=1.98$, $df=197$, $p<.05$ ）、⑤「課題発見力」（ $t=2.70$, $df=205$, $p<.05$ ）については、いずれも「与える」が「与えない」より有意に高かった。③「他者理解」（ $t=1.48$, $df=197$, n.s.）、④「自己理解」（ $t=1.80$, $df=197$, n.s.）、⑥「計画性」（ $t=1.78$, $df=197$, n.s.）は、有意な差は確認されなかった。

表4 「部活動が将来の就職・生き方に与える影響の有無」と「自己認識」に関する t 検定結果（高校時代）

質問項目	与える n=214		与えない n=35		有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
① 主体性	3.72	0.543	3.60	0.553	. n. s
② 協調性	3.71	0.582	3.54	0.561	. n. s
③ 他者理解	3.71	0.540	3.43	0.739	*
④ 自己理解	3.69	0.564	3.37	0.770	*
⑤ 課題発見力	3.69	0.547	3.31	0.758	**
⑥ 計画性	3.59	0.641	3.31	0.631	*

*p<.05 **p<.01

表5 「部活動が将来の就職・生き方に与える影響度の有無」と「自己認識」に関する t 検定結果（大学時代）

質問項目	与える n=169		与えない n=30		有意確率
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
① 主体性	3.63	0.643	3.23	0.774	**
② 協調性	3.60	0.683	3.33	0.711	*
③ 他者理解	3.60	0.658	3.40	0.770	. n. s
④ 自己理解	3.56	0.714	3.30	0.750	. n. s
⑤ 課題発見力	3.65	0.647	3.27	0.691	**
⑥ 計画性	3.53	0.756	3.27	0.740	. n. s

*p<.05 **p<.01

このように部活動が将来の就職や生き方に影響を「与える」と考える者は、高校部活動では「他者理解」「自己理解」「課題発見力」「計画性」を、一方、大学スポーツ活動においては「主体性」「協調性」「課題発見力」について、「与えない」と考える者よりも身についたと認

識している。

続いて、大学進学の際の入試区分別で差がみられるか確認するために、一要因の分散分析を行った(表6)(表7)。高校時代をみると(表6)、①「主体性」(F(2,248)=0.35 n.s.)、②「協調性」(F(2,248)=0.16 n.s.)、③「他者理解」(F(2,248)=2.28 n.s.)、④「自己理解」(F(2,248)=0.16 n.s.)、⑤「課題発見力」(F(2,248)=0.34 n.s.)、⑥「計画性」(F(2,248)=2.01 n.s.)、いずれの項目においても有意な差は確認されなかった。

次に、大学時代をみると(表7)、①「主体性」(F(2,198)=5.76, $p<.01$)、⑥「計画性」(F(2,198)=5.37, $p<.01$)は「AO・推薦」「スポーツ推薦」が「一般・共通テスト」よりも有意に高かった。③「他者理解」(F(2,198)=3.33, $p<.05$)は、「スポーツ推薦」が「一般・共通テスト」よりも有意に高かった。②「協調性」(F(2,198)=2.55 n.s.)、④「自己理解」(F(2,198)=0.89 n.s.)、⑤「課題発見力」(F(2,198)=1.08 n.s.)については有意な差は確認されなかった。

表6 「入試区分別」と「自己認識」に関する一要因の分散分析結果(高校時代)

質問項目	Ⓐ AO・推薦		Ⓑ スポーツ推薦		Ⓒ 一般・共通テスト		F値	有意確率	多重比較
	n=102		n=117		n=30				
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
① 主体性	3.71	0.556	3.73	0.519	3.63	0.615	0.348	. n. s	
② 協調性	3.69	0.613	3.70	0.561	3.63	0.556	0.160	. n. s	
③ 他者理解	3.59	0.680	3.75	0.472	3.63	0.556	2.282	. n. s	
④ 自己理解	3.64	0.594	3.67	0.587	3.60	0.724	0.164	. n. s	
⑤ 課題発見力	3.67	0.619	3.63	0.566	3.57	0.626	0.338	. n. s	
⑥ 計画性	3.59	0.619	3.58	0.605	3.33	0.844	2.013	. n. s	

表7 「入試区分別」と「自己認識」に関する一要因の分散分析結果（大学時代）

質問項目	Ⓐ AO・推薦 n=69		Ⓑ スポーツ推薦 n=117		Ⓒ 一般・共通テスト n=13		F値	有意確率	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
	① 主体性	3.54	0.739	3.65	0.592	3.00			
② 協調性	3.46	0.797	3.65	0.592	3.31	0.855	2.545	. n. s	
③ 他者理解	3.48	0.759	3.66	0.575	3.23	0.927	3.329	*	Ⓑ>Ⓒ
④ 自己理解	3.48	0.779	3.56	0.662	3.31	0.947	0.889	. n. s	
⑤ 課題発見力	3.55	0.758	3.64	0.579	3.38	0.870	1.078	. n. s	
⑥ 計画性	3.51	0.816	3.56	0.675	2.85	0.899	5.372	**	ⒶⒷ>Ⓒ

*p<.05 **p<.01

最後に、大学の専攻別（体育系・人文系・社会系）で差がみられるか確認するために、一要因の分散分析を行った（表8）（表9）。

まず、高校時代をみると（表8）①「主体性」（F (2,247) =0.82 n.s.）、②「協調性」（F (2,247)=1.06 n.s.）、③「他者理解」（F (2,247) =0.89 n.s.）、④「自己理解」（F (2,247) =0.18 n.s.）、⑤「課題発見力」（F (2,247) =0.84 n.s.）、⑥「計画性」（F (2,247) =0.18 n.s.）、いずれの項目においても有意な差は確認されなかった。

次に大学時代をみると（表9）、①「主体性」（F (2,197) =0.04 n.s.）、②「協調性」（F (2,197) =0.13 n.s.）、③「他者理解」（F (2,197) =0.13 n.s.）、④「自己理解」（F (2,197) =0.32 n.s.）、⑤「課題発見力」（F (2,197) =0.35 n.s.）、⑥「計画性」（F (2,197) =0.02 n.s.）、いずれの項目においても有意な差は確認されなかった。

表8 「専攻別」と「自己認識」に関する一要因の分散分析結果（高校時代）

質問項目	① 体育系		② 人文系		③ 社会系		F値	有意確率	多重比較
	n=102		n=117		n=30				
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
① 主体性	3.69	0.559	3.82	0.465	3.68	0.551	0.816	. n. s	
② 協調性	3.69	0.580	3.79	0.485	3.60	0.581	1.060	. n. s	
③ 他者理解	3.66	0.568	3.79	0.545	3.62	0.635	0.890	. n. s	
④ 自己理解	3.63	0.617	3.70	0.637	3.66	0.606	0.184	. n. s	
⑤ 課題発見力	3.66	0.579	3.67	0.595	3.54	0.646	0.835	. n. s	
⑥ 計画性	3.57	0.646	3.52	0.712	3.52	0.614	0.175	. n. s	

表9 「専攻別」と「自己認識」に関する一要因の分散分析結果（大学時代）

質問項目	① 体育系		② 人文系		③ 社会系		F値	有意確率	多重比較
	n=136		n=19		n=43				
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
① 主体性	3.57	0.697	3.53	0.697	3.58	0.626	0.043	. n. s	
② 協調性	3.56	0.728	3.63	0.597	3.53	0.631	0.128	. n. s	
③ 他者理解	3.57	0.707	3.63	0.597	3.53	0.631	0.133	. n. s	
④ 自己理解	3.49	0.779	3.63	0.597	3.53	0.592	0.324	. n. s	
⑤ 課題発見力	3.62	0.689	3.53	0.631	3.59	0.668	0.347	. n. s	
⑥ 計画性	3.49	0.789	3.53	0.697	3.49	0.703	0.024	. n. s	

以上が分析結果である。高校時代においては入試区分の違いによる意識の差はみられなかった。しかし、大学までスポーツを継続する者に注目すると、AO・推薦、スポーツ推薦入学者が、一般選抜入学者よりも「主体性」「計画性」が養われていると考えるなど、入試区分の違い、キャリア形成意識に影響を与えていることが示されたのである。また、専攻別でみると、高校時代、大学時代、いずれも意識の差はみられなかった。次節では、これらを基に考察を進めてみたい。

4. 考察

分析を通して明らかになったのは、大学進学時の入試区分や、体育会の所属の有無にかかわらず、部活動が将来の就職や生き方に影響を与えている者が多いことである（表2）

(表3)。また、影響を与えると考える者は、高校部活動経験を通じて「他者理解」「自己理解」「課題発見力」「計画性」が養われたと考えていた(表4)。これは、冒頭で示した基礎的・汎用的能力の具体的内容①から③に該当する能力の形成や、焦点化している「仕事に就くこと」の具現化につながると考えていることを示している。

そして、入試区分別でみると、高校時代では意識の差はみられず、全体的に数値も3.5前後からそれ以上を示すなど、高校部活動が基礎的・汎用的な能力形成に寄与していると考えられる傾向がみられた(表6)。一方、大学までスポーツ活動を継続した場合は違いがみられ、部活動経験を活用しやすいAO・推薦、スポーツ推薦入試を経て入学した者は、一般・共通テストよりも「主体性」「他者理解」「計画性」が養われたと考えていた(表7)。これは、かれら自身が部活動経験を肯定的に捉え、それを大学進学といったキャリア形成に活用していることを背景におけば、大学入学後もスポーツ活動を継続し、その経験を通じて自身にとって有益な能力を形成していると捉えていることがみてとれる。他方で、大学の専攻別で違いがみられなかったのは(表8)(表9)、今回、部活動経験者のみを対象としているため断定的な考察はできないが、かれらは学びの内容よりも部活動経験が能力形成に影響すると考えていることがうかがえる。この点は、例えば、部活動未経験者を含めた調査を実施し、検討を進める必要がある。

また、今回AO・推薦とスポーツ推薦には異なる傾向があると考え、これらを区分し分析を行ったが、明確な違いを確認することができなかった。この点もさらに詳細な分析は必要ではあるが、大学入学後までスポーツ活動を継続する者は、スポーツ推薦と同程度にAO・推薦入試においても部活動経験を活かしていることが考えられる。このように、それまで努力をしてきたスポーツ活動が自身のキャリア形成に強く関わっていると考えること自体は、自己アイデンティティの形成においてプラスの側面がある(大隈・清水2014)ことから望ましいといえる。

以上のような学校スポーツ活動の有効性を示すことができる一方で、問題点も指摘しておかなければならない。先述の榎本は、体育会系学生にイメージ、心理的特徴について指摘をする中、否定的なイメージとして「勢いだけで動く」「融通が利かない」「自分の頭で考えない」「単純な認知構造」と論じている。また、心理的特徴では、「異質な他者への排他性が強い」「権威主義的傾向が強い」「現在の体制を疑わない」「社会の矛盾に気づきにくい」といったネガティブな側面を有すると述べている(榎本2020:82-89)。この榎本の指摘は、大学時代までスポーツ活動を継続してきた者に限定した内容であるが、スポーツ活動を通じて得られる能力においては、必ずしも肯定的な部分だけではないことを示しており、重要といえる。

また、伊藤も、部活動と社会生活のレリバンス(関連性)を検討した結果、「部活動での人間関係上の経験」や「部活動でのつらい経験」が「個人の忍耐によるつらい職場環境への対処」「職場におけるつらい上下関係の正当化/再生産」につながっている点を指摘し、「部活動は若者たちを問題のある職場環境に〈適応〉させるための装置になっているということが示唆される」と述べており(伊藤2017)、部活動経験が無理な働き方を受け入れてしまう思考を生じさせる可能性に言及している。つまり、榎本や伊藤の指摘は、部活動が持つ教育的意義

とは異なるもう一方のいわば負の側面といえる。

そして、最後にもう1点指摘をしておきたい。先述したように、新たな大学入試制度が開始されたことにより、高校時代の部活動経験が、これまで以上に大学進学行動に影響を与え、生徒のキャリア形成に大きく関わるようになった。そして、その評価対象として主体性や協働性があげられていた。本稿の調査結果において主体性に注目すると、部活動が将来の就職や生き方に与える影響の有無の面では、高校時代は差がみられなかったが、大学時代では与えると考える者が有意に高かった。また、AO・推薦入試やスポーツ推薦入試によって大学進学を果たした者は、一般・共通テストよりも有意に高い結果となった。つまり、大学までスポーツ活動を継続する者や、部活動経験を自身の強みとして活かせる入試を経て大学に進学した者は、高校部活、大学スポーツ活動を通じて主体性が身についたと考える傾向があり、大学側としても、入試の際、多様な評価方法によって主体的に学ぶ態度を持つ人材を確保できる点で部活動経験者の獲得は有意義といえる。

しかし、内田は、部活動が学校教育の一環であることを理由にして、生徒や教員に強制がはたらき、自主的な活動なのに強制されている現状を指摘し、この自主性が強制性を覆い隠す役割をもっており、部活動が強制性を伴いながらも、自主性という名のもとに肥大化していると論じている（内田 2017）。つまり、かれらが部活動経験を通して得られたと認識する自主性や主体性が強制性を伴う環境の中で育成されてきたとすれば、その自主性や主体性は大学や企業（社会）が求める能力といえるのか、慎重な見極めが必要になるといえ、この点は重要な分析視角といえる。

いずれにしても、単に、学校スポーツ活動が社会生活において求められる基礎的・汎用的能力の形成に寄与するといった肯定的な側面だけをみるのではなく、同時に負の部分に直面しないための仕組み、指導の在り方を、今後、学校現場は意識的に考えていく必要があるといえよう。

5. 今後の課題

本稿の限界について述べておきたい。今回は部活動経験者のみを対象としたが、能力形成においては、部活動経験のみならず、他の学校教育活動が影響していることは否定できない。先述したように、専攻分野の影響等については部活未経験者との比較検討をする必要がある。

また、学年に偏りがみられ、2年生が全体の76.6%と多い。回顧調査であることをふまれば、学年によって、高校時代の記憶に対する差が生じることや、大学生活経験の差によっても傾向が異なるのは十分に考えられる。これらの点は次回の課題としたい。

注

- 1) 本稿は学校スポーツ活動を対象としており、本文に記される部活動は運動部活動を指すものである。また「学校スポーツ活動」については、中学、高校の活動を「部活動」、大学の活動を「大学スポーツ」と示している。

- 2) 河合塾 2023 年度入試難易度ランキングにおいて、いずれの大学も偏差値 45 以下の位置にある。河合塾の偏差値については他社よりも低く出る傾向があることを考慮し、中下位と位置付けることとした (河合塾 2022)

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2018) 「第 1 回部活動の役割を考える 子どもたちに適切な活動の機会を提供するために その 2」 https://berd.benesse.jp/special/datachild/comment01_2.php : 2022 年 12 月 21 日取得
- 榎本博明 (2020) 『体育会系上司「脳みそ筋肉」な人の取り扱い説明書』ワニブックス :82-101
- 長谷川誠 (2020) 「部活動が生徒のキャリア意識に与える影響－生徒指導機能の視点も含めて」『関西教育学会年報』44:175-179
- 伊藤秀樹 (2017) 「部活動と社会生活のレリバンス：〈適応〉の装置としての部活動？」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』68 (1):71-82
- 金森史枝・蛭田秀一 (2018) 「大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義－体育会運動部を通して何を習得しているのか」『総合保健体育科学』41 (1):45-54
- 河合塾「入試難易度予想ランキング表」 <https://www.keinet.ne.jp/university/ranking/> : 2022 年 9 月 20 日取得
- 清宮孝文・依田充代・門屋貴久 (2015) 「体育系大学生の大学生活不安に関する研究」『日本体育大学紀要』45 (1):27-37
- 栗山靖弘 (2017) 「強豪校野球部員のスポーツ入試による進学先決定のメカニズム：部活を通じた進路形成と強豪校の存立基盤」『スポーツ社会学研究』25 (1):65-80
- 松繁寿和 (2005) 「体育会系の能力」『労働政策研究・研修機構「日本労働研究雑誌」』537:49-51
- 文部科学省 (2008) 「中学校学習指導要領 (総則)」 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/news/youryou/chu/sou.htm : 2022 年 10 月 1 日取得
- 文部科学省 (2010) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (第二次審議経過報告)」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1298260.htm : 2022 年 10 月 1 日取得
- 文部科学省 (2013) 「第 2 期教育振興基本計画」 http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf : 2022 年 10 月 1 日
- 文部科学省 (2016) 「高大接続システム改革会議「最終報告」」 https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf : 2022 年 10 月 16 日取得

文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説特別活動編」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387018_13_2.pdf：2022年12月21日アクセス

文部科学省（2018）「2040年に向けた高等教育のグラウンドデザイン」https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf：2022年10月10日取得

大隈節子・清水一巳（2014）「運動部活動が高校生のアイデンティティに与える影響」『三重大学教育学部研究紀要』65:131-140

清水将 2011 「高等学校における運動部活動の教育課程上の位置づけに関する研究」『東亜大学紀要』14:17-32

内田良（2017）『ブラック部活 子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版社

内海和雄（2009）『スポーツ研究論－社会科学の課題・方法・体系－』創文企画：106

（受付日：2022. 12. 8）